

野辺地町向田地区周辺の古代集落群

—Googleマップ・Google Earth空撮写真による遺跡把握一例—

永嶋 豊*

1. はじめに

近世盛岡藩の野辺地湊と下北半島の中心田名部を結ぶ「田名部街道」は国道279号線(はまなすライン)にあたる。下北半島縦貫道路(国道279号バイパス)はむつ市を起点に七戸町で東北縦貫自動車道八戸線と結ぶ地域高規格道路であり、野辺地町向田地区では海岸線から1.5kmほど内陸を走る。野辺地町教育委員会と青森県埋蔵文化財調査センターによる事前調査で、一帯の段丘上から縄文時代と平安時代の遺跡が次々と姿を現すこととなった(図1)。

私は平成12～14年に野辺地町有戸地区の有戸バイパス区間の発掘調査をする機会を得て、中でも当地域最大の古代集落向田(35)遺跡の調査では、数々の成果を得ることとなった。

2. むつ湾南東岸域の古代の遺跡立地

当地域の古代集落は『向田(37)遺跡』の「周辺の遺跡」に詳しい(瀬川 2006)。

瀬川は特に向田地区の古代集落について、海岸付近に位置するもの、むつ湾沿岸と並走する中位段丘の低位部(10～20m)に位置するもの、高位段丘の低・中位部(40～70m)に位置するものと三分している。その中で海岸付近の野辺地蟹田(3)遺跡、高位段丘に位置する明前(1)遺跡、その中間の野辺地蟹田(4)・(6)・(7)・(11)遺跡の間には、埋没途中の竪穴建物跡が複数存在していることから、これらを同一丘陵上の一連の集落群と捉えている。同様に向田(35)遺跡を拠点として、有戸浜遺跡、向田(21)・(22)・(23)・(24)・(34)遺跡を有戸川北岸域のまとまり、更に北側の巫女沼周辺や野辺地町市街地を流れる野辺地川の東西にも拠点的な集落遺跡と周辺の集落遺跡のまとまりを想定している。

3. 各遺跡の特徴

当地域で発掘調査が行われた主要な古代集落は、南から有戸鳥井平(4)遺跡、明前(1)遺跡、向田(35)遺跡、向田(34)遺跡、向田(24)遺跡、向田(37)遺跡、向田(40)遺跡があげられる。

有戸鳥井平(4)遺跡では9世紀末から10世紀頃の竪穴建物跡4棟が調査されており、第2号竪穴建物跡の床面出土の直刀2点は、当地の集団の武装状況を知る上で特筆されるものである。

明前(1)遺跡は竪穴建物跡の存在を示す数か所の窪みが見られる山上の平坦部を3条の壕が囲っている、所謂防御性集落のひとつである。

向田(35)遺跡は、当地域最大の古代集落跡であり、平安時代の竪穴建物跡数十棟の調査がなされている。丘陵上の平坦部には推定160～900㎡の小溝区画の中に竪穴建物跡が見られる。そこから有戸川沿いの沖積地への斜面にはひな壇状に竪穴建物跡が並び、周辺に並ぶピットを区画柵列とするならば、最も広い部分でも推定375㎡程度である。段丘平坦部の竪穴建物跡の占有面積が広く、斜面の竪穴建物跡の占有面積がより狭いことを良く示している。区画溝や柵列跡に加え「周堤+竪穴建物跡+掘立柱建物跡」のセットを良好に示すものもある。第3号竪穴住居出土の北宋銭「至道元宝(西暦995年初

*青森県埋蔵文化財調査センター



図1 野辺地町東部の古代遺跡図

鋳）」は当集落跡の存続年代を示唆し、擦文土器、製塩土器、刀や鐔をはじめとした鉄製品類、炭化した各種穀物類、住居床面土坑内から並んで出土した人歯も本遺跡を特徴づけている。

向田(35)遺跡が段丘平坦部と南斜面地に展開した数十棟規模の大集落ならば、向田(34)遺跡は同一段丘の北端部に営まれた竪穴建物跡数軒規模の集落である。両遺跡は10世紀後半に同時に存続したと考えられるが、段丘南半の大規模集落、北端の小規模集落と対照的である。

向田(24)遺跡は白頭山苦小牧火山灰降下前後の集落跡で、検出された4棟すべてが焼失していた。1辺8.4mの大型の第1号竪穴建物跡の周堤下には白頭山苦小牧火山灰が見られることから10世紀後半とされる。海岸線より約1km内陸に位置するが、製塩土器も出土している。

向田(37)遺跡では、平安時代の竪穴建物跡5棟、竪穴遺構2棟、土坑8基、溝跡3条、柱穴状ピット34基、焼土4基が検出されており、10世紀前半から後半にかけての集落跡とされている。調査区西側の緩やかな尾根では、14か所の埋没過程の竪穴窪地が確認されており、うち3か所は一辺9m規模と考えられている。現段階で、この一帯では向田(35)遺跡に次ぐ規模の古代集落跡と言えよう。

向田(40)遺跡は竪穴建物跡の周堤下の火山灰の堆積状況から、苦小牧白頭山火山灰降下直後に構築された小集落と考えられており、中規模の竪穴建物跡2棟の調査が行われている。第1号竪穴建物跡はこの時期には珍しく地下式カマドが構築されている。

4. 空撮写真を用いた未周知の埋蔵文化財包蔵地探索

陸奥湾東南岸域の古代集落の中で、最も面積が広く竪穴建物跡が多く検出されているのは、有戸川の北岸段丘の向田(35)遺跡である。下北縦貫道路の予定地となったことによって姿を現した巨大遺跡であるが、何故この場所に圧倒的に規模の大きな拠点集落が築かれたのかが調査後20年間気になっていた。

比較的水量が望める有戸川沿いでの水田がその一要因か、河口から1.3kmほど内陸に入るが、丘陵上に一定の平坦面が確保できる場所だからか、等々考えながらGoogleマップの空撮を度々見ていた。向田(35)遺跡に北接する向田(34)遺跡は大きく北側に落ち込む地形に立地し、沖積地を挟んだ北側の丘陵



写真1 向田(35)遺跡 全景(南西から)

上位の平坦面よりも手前斜面のほうが竪穴住居跡が密集
(青森県教育委員会 2004『向田(35)遺跡』より転載)

には白頭山苦小牧火山灰降下前後の集落とされている向田(24)遺跡があり、隣接して面積がより大きい向田(23)遺跡がある。瀬川が論じたように同一丘陵を海側へ辿ると、有戸川河口に最も近い段丘の先端部には遺跡地図で向田(22)遺跡が位置している。

この向田(22)遺跡の同一段丘東側をGoogleマップの空撮写真で眺めると、畑地の中に黒っぽい幾何学文様が、数点確認出来る。空撮写真の縮小・拡大を繰り返すと、形が明瞭になり、「四角形」、「一部が飛び出した四角形」、「L字形」等々が、浮かび上がってくる※(図2A)。

これが未周知の古代の集落跡であることは明白であり、当地域の古代様相に明るい人ならば、平安期の集落、それも10世紀以降の可能性が高いことも理解いただけるのではないだろうか。ここまで明瞭に平安時代の遺構群が、空撮に写っていることにも大変驚いたが、周辺域の空撮では同様の状況は確認出来ない。同様の遺構が周辺に眠っている可能性は極めて高いが、この一区画の畑地においてのみ様々な条件が揃ったことによって、平安時代の集落跡が表出したと考えられる。

周辺域の平安時代遺跡の調査成果から、この幾何学文は未周知の埋蔵文化財包蔵地の存在を示唆するものである。仮にこれらの幾何学文の中で、竪穴建物跡に見えるものを赤色、その付属掘立柱建物跡に見えるものを緑色、一辺や二辺・三辺のみが確認できそうなものを黄色でトレースした(図2B)。赤色線に仮にSI、黄色線にSXの名称を付し、01から数字を与えた。

SI01は一辺4m程の中型の竪穴建物跡の可能性がある。SI02は一辺7m規模のやや大型のもので、北東壁側にSX12としたものが隣接しており張り出しの可能性もある。また南東壁側に半地下式と考えられるカマド煙道を明瞭に確認することができ、更に南東壁から8mほど南東側に柱穴が確認されることから付属掘立柱建物跡の可能性が高いと考えた。SI03は、一辺5m程の竪穴建物跡の可能性があり、北壁に張り出し、東壁にカマド煙道らしきものが確認できる。SI04としたものは、SI02と規模や付属施設、主軸方向が同様である。一辺7mほどのやや大型の竪穴建物跡で、カマド煙道側に付属掘立柱建物跡が付属するものと考えた。付属掘立柱建物跡の中に2mほどの竪穴あるいは方形土坑らしきものが確認出来るが、付帯施設である可能性が高い。SI05は一辺6.5m程の竪穴建物跡の可能性があるので、写真上で判定出来る重複関係よりSI04より古いと考えられる。主軸を北方向とするもので、SI01・SI06も同方向を指向している。SI06としたものは一辺4m強で、空撮写真の輪郭から北壁にカマドを有する可能性があり、その場合、他より古い要素と言えよう。

SXとしたもののいくつかは竪穴建物跡と考えられるが、SX02の西側やSX04・06の北側には複雑な文様が確認出来ることから、土中には更なる遺構が眠っている可能性が高い。SI02とSI04は一辺7mと比較的大型であり、張り出しを有したり、また付属掘立柱建物跡を有することから、南1kmに位置する向田(35)遺跡の上位平坦面の竪穴建物跡に類似していると言えよう。

5. 有戸川河口域の古代大集落の可能性

この空撮に写った幾何学文の存在は、関係機関へ情報提供を行うこととし、今後の対応については、検討中である。この幾何学文と向田(22)遺跡が立地する段丘は北東―南西に幅400mを超える幅広の平坦面を有しており、もし一連の古代集落となれば、拠点集落と考えた向田(35)遺跡の段丘に遜色無い面積となる。平坦面の面積が集落規模を示すものではないが、要所である河口部に最も近い段丘を占有した大集落が存在していた可能性は否定できない。

さらに近世の田名部街道の前身として、陸奥横浜へと向かう「砂道」のような道が古代にも存在していたとすると、有戸川河口に近い位置に営まれた集落の重要性は高いと言える。

発掘調査の結果、この地の蝦夷社会は10世紀半ば以降に活況を迎えたことが明らかになっている。

堅穴建物跡に暮らし、付属の掘立柱建物を有するものや各戸を柵や溝で区画することもあった。コメ・アワ・ヒエ・ソバを栽培し海産物にも頼った。砂鉄を用いた鍛冶を行い、鉄製品で武装し、仏教要素も見られた。地元の土師器に加え擦文系土器も製作し、五所川原の須恵器も用いた。海岸部では製塩を行い内陸集落にも持ち込まれた。一帯の古代社会は11世紀まで存続した可能性が高い。



図2 A Googleマップ 野辺地町向田地区畑地の拡大

耕作中の畑地に遺構群が明瞭に表出している。1 km 南に位置する向田(35)遺跡と同様の平安時代の堅穴建物跡や付属掘立柱建物跡である可能性が高い。

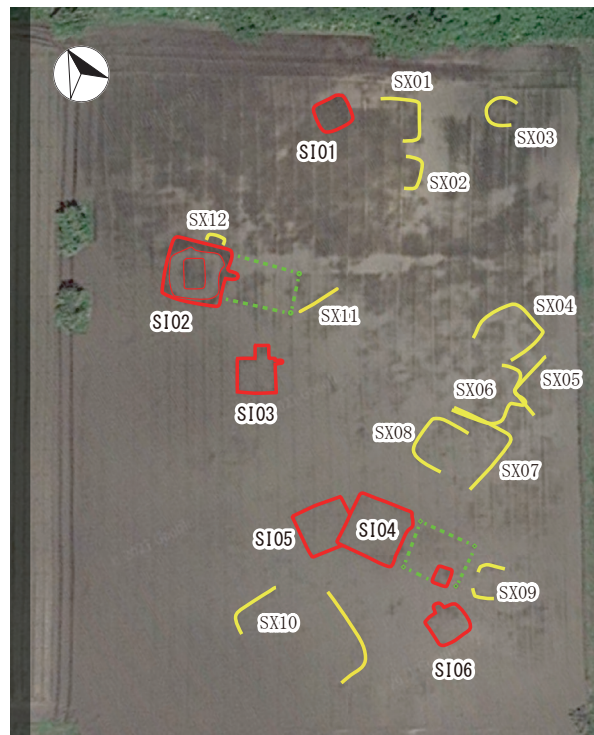


図2 B Googleマップ をトレースしたもの

図2 A で確認できる遺構の輪郭をトレースしたもの。赤色は平安時代の堅穴建物跡の可能性が高いもの。緑色はその付属掘立柱建物跡と考えられるもの。黄色は一部の輪郭しか見えないもの。

6. おわりに

週末の自宅においてGoogleマップやGoogleEarthで遊んでいた時に見つけた不思議な幾何学文であるが、遺跡把握の一手法として紹介した。同様の段丘は周辺に多く、今後は綿密な踏査と埋没過程の堅穴建物跡の地図上へのプロットが必要であり、それこそ野辺地の文化財保護行政の一端を担い続けた瀬川滋が辿ってきた道である。

空撮からの遺跡探しでは、本例のように明瞭なもの多くはないが、畑地だと黒っぽい輪郭や埋没谷は良く見える。水田では多賀城市内館跡の堀跡のクロープマークが有名である。学校の校庭の例では古代の円形周溝が検出された殿見遺跡、八戸市立明治中学校例が有名で、現在の空撮でも校庭に複数の大小の円形が見えるのは円形周溝の名残りであろう。各自治体の畑地の空撮を眺めていくのも良いし、有名遺跡周辺の段丘裾部の畑地を注視するも良い。水田地帯でのクロープマークや校庭、工事現場、岸近くの浅い海底も注視する必要があるだろう。

本論は、GoogleマップやGoogleEarthの空撮の中に幾何学文を発見した私が、職場の所属グループに自慢げに語ったところ、何らかの形で発表したほうが良いとの声を得て、文章化したものである。手

軽な手法である一方重要な発見に繋がる可能性もあり、遺跡の立地や道・河川などの交通との関係も論じることができる可能性を秘めている。これらの発見が行政手続きを経て、埋蔵文化財包蔵地の登録へと至り、文化財保護へと繋がることも期待される。

執筆にあたり、当埋蔵文化財調査センターの令和3年度の調査第3グループ職員と長年野辺地町の文化財保護行政を担ってきた瀬川滋氏、共に調査を担当した職員に心より感謝申し上げたい。

※令和4年早々にGoogleマップ・GoogleEarthの空撮写真の更新が行われ、図2の幾何学文は現在確認できない状況となった。

※本論の校正中に、瀬川滋氏の訃報に接することとなった。平成12～14年の野辺地蟹田(10)・(12)遺跡、向田(30)・(31)・(34)・(35)遺跡の発掘調査において、瀬川氏より多大なるご指導をいただいた。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

【引用参考文献】

- | | |
|-----------|--|
| 青森県教育委員会 | 2003『野辺地蟹田(10)遺跡Ⅱ 野辺地蟹田(12)遺跡 向田(34)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第343集 |
| 青森県教育委員会 | 2004『向田(35)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第373集 |
| 青森県教育委員会 | 2006『向田(37)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第408集 |
| 野辺地町教育委員会 | 2001『向田(24)遺跡 有戸鳥井平(4)遺跡 有戸鳥井平(5)遺跡』野辺地町埋蔵文化財調査報告書 第7集 |
| 野辺地町教育委員会 | 2001『向田(33)遺跡』野辺地町教育委員会第8集 |
| 野辺地町教育委員会 | 2003『向田(29)遺跡』野辺地町教育委員会第10集 |
| 野辺地町教育委員会 | 2004『向田(26)遺跡』野辺地町教育委員会第13集 |
| 野辺地町教育委員会 | 2007『向田(38)・(39)・(40)遺跡』野辺地町教育委員会第16集 |
| 野辺地町教育委員会 | 2007『向田(36)遺跡』野辺地町教育委員会第17集 |
| 瀬川 滋 | 2006「第2節 周辺の遺跡―野辺地町管内の古代集落跡―」『向田(37)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第408集 |